

# 生涯学習としての英語

岡田 俊恵

桐蔭横浜大学工学部

(2007年3月1日 受理)

## 1. はじめに

生涯学習とは自己啓発、人生の充実、生活の向上などのために生涯を通じて学習することであり、幅広い内容を含む言葉である。いわゆるカルチャー・スクール、生涯学習センターと銘打っている組織でも、開講されている講座内容は、趣味、実益的なものから資格試験対策まで多岐にわたる。また、その性格上、受講者の年齢や背景、関わり方も様々であり、生涯学習という言葉で一括りにして論ずることはなかなか難しいと思われる。筆者は長年、教育に携わってはいるものの、教育学を専門としているわけではないので、学習や教育に関する専門的な知識はない。したがって本稿は、教育学的見地から生涯学習を論ずるものではなく、主に中高年の受講者を対象とした「学びなおす英語」という講座の講師を務めている体験を踏まえ、中高年の英語の生涯学習という観点に絞って、簡単にまとめてみたい。

## 2. 「学びなおす英語」の変遷

筆者の勤務する桐蔭横浜大学は、1999年(平成11)に「桐蔭生涯学習センター」を開

設した。開設当初は、大学傘下の組織であるから、なるべく学問の香りのする講座を開講するという方針であった。そのため、筆者も専門分野であるシェイクスピアの戯曲を扱う講座を設定した。しかし、残念ながら、受講希望者が開講最低人数に満たず、開講できなかった。そこで次の期に、学問云々ではなく、英語を基礎から復習する「学びなおす英語」という講座を設定したところ、十分な数の受講者が集まり、2000年(平成12)1月から開講の運びとなった。単発的な講義は別として継続的に講座を持って社会人を教えた経験はなかったので、何をどのように教えたらよいか、全くの手探り状態であった。受講者のレベルや年齢層も全くわからなかったので、当初は基本文法を復習する講座としてスタートし、受講者参加型ではなく、講義形式の授業形態をとった。

ところが1月～3月期、4月～7月期と2期続けた時点で、筆者の予想しなかった事態が生じた。新規受講者より継続受講者の方が圧倒的に多かったのである。そこで、いつまでも文法だけを題材とした講義を受動的に聞いているだけではつまらないのではないかと考え、9月期からは易しい英文を読みつつ文法の復習をしていく内容に変更した。ただ、この段階では、一気に予習を前提とする講座

にまで改変してしまうのは躊躇われたので、予習をしなくても参加できるように、教材にはできるだけやさしい英文を選び、授業中、受講者には音読のみお願いすることとした。

桐蔭生涯学習センターの筆者の講座の場合、受講生の大半は家庭の主婦である。日本の奥ゆかしい女性は、なかなか自分の実力を披露しないのが常であり、かなり実力のある方でも、こんな教材では易しすぎるといようなことはおっしゃらず、「英語を基礎からやり直したいのでこれで充分です」と謙虚である。当初は1クラスしか開講していないこともあり、いろいろなレベルの方が中学3年程度の教材と一緒に学んでいた。しかし、何期も続けて受講してくださる方が増え、新しく受講される方とのレベル差が次第に大きくなったこと、受講希望者が多く収容しきれないという状況が続いたことなどから、2003年（平成15）の9月期から初級～中級クラスと中級～上級クラスの2クラスに分割することとなった。この段階から、思い切って難易度も多少上げ、受講者に音読だけではなく、訳もつけていただくように方針を変更した。その後、さらにレベル設定を明確にするために入門クラスと初級クラスが新設され、筆者の担当する講座は中級クラス、上級クラスとなって現在に至っている。

### 3. さまざまな受講生

桐蔭生涯学習センターは住宅街に位置し、開講時間帯も平日の午前と午後に限られていることから、受講生は中高年の主婦や定年退職後の方が多い。勿論、仕事をお持ちの方もいらっしゃるが、時間的に融通のきく仕事の方に限られる。新しい技能を身につけたり、スキルアップを図って、それを仕事に生かそうというような方は比較的少ない。筆者の講座にも、TOEICや英検の受験を念頭においている方、通訳・ガイド資格の取得を目指す方などもいるが、少数にとどまる。大半の方は、何かに生かそうという実利目的ではなく、

「好きだから」、「楽しいから」というのが受講の第一義である。これは5年ごとに実施されている総務省統計局の「社会生活基本調査 2001年（平成13）」（文末11頁参考資料表1）の結果とも一致している。英語学習の目的は基本的に「自分の教養を高めるため」なのである。

これまで6年間の講義で、私のクラスの最年少受講者は19歳の大学浪人生、最高齢者は72歳である。受講のきっかけはさまざまである。30代後半から40代前半の女性、特に既婚者の場合は、中学生になったお子さんに英語を教えようと思ったら全く忘れてしまっていることに気づき、もう一度勉強しなおそうと思ったというケースが多い。40代後半から50代以上の方は、子育ても一段落して時間の余裕ができ、映画や海外旅行などで英語に触れ、もう一度勉強してみたくなったという方が多い。男性の場合は、圧倒的に定年退職者が多い。平日のクラスであるにもかかわらず、仕事の合間を縫って受講して下さった例もあるが、やはり時間的に無理が多いのであろう、最後まで受講できた方はいない。定年退職者の場合は、在職中、仕事で英語を使っていたので、それを錆びつかせたくない、知的刺激が欲しいというのが一番の理由である。このように、動機も年齢も背景も多種多様な方々の集まりであるから、講師としては、できるだけ多くの方が興味をもてるような教材を選定するように努めている。

中高年の受講者の場合、仕事をしていないからいつでも暇かということ、実はそうでもない。それぞれの家庭の事情があったり、英語の他にも健康増進のためのスポーツや趣味の習い事をしている例が多い。勢い、都合のよい曜日や時間帯が限られており、同時時間帯にいろいろなレベルの講座が開講されているのでなければ、実力アップに応じて入門→初級→中級クラスへと、すんなりクラス移動することは難しい。また、先にも述べたように、何かを受験しようというような具体的かつ差し迫った目標を持っている方は少ないので、

仮に同一時間帯にいろいろなレベルの講座を用意しても、学生が通う塾や予備校のようにクラス移動がスムーズにいくわけではない。従って、一応の目安としてレベル設定はしていても、ある程度のばらつきは避けられないため、新しい学期が始まるごとに、その点はご了承くださいようにお願いしている。

生涯学習の場合、継続して学んでいく上ではクラスの雰囲気や人と人とのつながりも大切な要素となる。どちらかと言えば、慣れたクラスで和気藹々とした雰囲気の中で学びたいと思っている方が多いようである。ある程度の期間継続して受講されると、その講座のもつ雰囲気に馴染み、受講生同士のお付き合いも始まるようである。筆者自身、生涯学習の場合は人間関係に惹かれての受講があってもよいと思っているためであろうか、クラスがまとまればまとまるほど、別のクラスへの移動は難しくなるのが現状である。筆者の講座の場合、8割～9割が継続受講者で、1～2名ずつ交代してゆくという緩やかな変化であるため、新しい受講者は最初戸惑いを感じられるようである。すぐに馴染んで下さる方と出来上がっている講座の雰囲気に溶け込めない方に二分されるのは致し方ないところである。他の受講者と共通点が少なかったり、なかなかクラスの雰囲気に溶け込めない様子が伺える方は、残念ながら、1期だけで辞めてしまわれる場合が多い。

しかし、大抵の場合は新しい受講者でも最初の数回をクリアしてしまうと、授業の進め方やクラスの雰囲気に次第に慣れて下さる。もとより常識ある大人の集団であるから、皆さん、多少のレベルのばらつきや雰囲気の違いも大らかに許容して下さる。家庭の主婦や退職後の方は、ともすれば限られた範囲の世界で生きることになりがちであるが、職業、年齢、背景、レベルなどさまざまな人のいるクラスで、むしろそれを楽しむ余裕のようなものが感じられる場合が多い。週1回、英語を読むために集まっている仲間、その中には通訳・ガイドという英語の専門家もいれば、

プロの音楽家、茶道や華道の師範、日本語の先生、薬剤師などいろいろな分野の専門家がいる。趣味の手芸や園芸で玄人はだしの腕前の方もいる。そうした全く別の世界で培った感性やこれまでの人生体験が、英文の読みに反映される。受講者がそれぞれ他の受講者の個性を尊重し、他の受講生の考えにも謙虚に耳を傾けつつ、自分の意見も言えるようになると、講座が賑わってくる。講座を活性化させるのは受講生自身であり、各人各様の豊かな人生体験なのである。

#### 4. 中高年向けの講座のあり方

初めて講座を持たせて頂いたときから、社会人、特に中高年を対象とした生涯学習では「楽しい」「充実している」という満足感を味わえることが何よりも大切なのではないかと考えてきた。英語の場合は勉強という色合いが濃いものの、学生ではないのだから、いわゆる「習い事」、「趣味」の世界に近い方がよいのではないかと思ったのである。いついつまでに、どうしてもこれを習得しなければならぬという差し迫った目標がある例は少ないのだから、息長く続けられるものでなければならない。「習い事」は長く続けさえすれば、必ず成果は出る。それはテストで何点をとるとか、偏差値がどうこうという数値目標ではない。いろいろなレベルの人が、その人なりに向上を実感し、満足できればよいのである。

それでは、どのようにしたら向上を実感してもらえるのか。これは、筆者もこの6年間にいろいろと試してみた。筆者の講座では、全員にノルマとして課しているのは本文の音読である。予習を前提とした内容に変えてからも、「今週は予習ができなかったので、パス」は遠慮なく申し出てよいことになっているが、風邪で声が出ないというような場合を除いて、音読はパスできない。大きな声で音読する、これは一見なんでもないことのように思える。筆者自身、当初は音読など当たり前のことだと思っていたが、ある受講生の方から

「大きな声で英文が読めるようになっただけでも、大変な進歩なんです」と言われて、改めて音読の効用を実感した。考えてみれば、筆者のように教師を生業にしているような者とは違い、普通の方は日頃、人前で大きな声を出すことなどない。また、10年も15年も英語に触れていないと、昔知っていたはずのごく易しい単語でも活字が目の前で踊ってしまい、慣れるまではなかなか単語が認識できないという感想を伺ったこともある。そのようなお話を伺ってから、一人ひとりの音読をいっそう注意深く聞き、音読を通して英語力の向上を把握するように努めている。実際、最初ははやたどたどしかった読み方がスラスラ読めるようになる頃には、英語の力も確実に進歩している。「音読がとてもお上手になりましたね」と申し上げると、「そうなんです。自分でもそう思います。内容も前よりずっとよくわかります」と、嬉しそうなお答えが返ってくる。

忘れてしまった英語の感覚を取り戻してもらおうと、音読筆写を試してみたこともある。本文を音読しながら写してもらい、1分間で何語写せるか測定するのである。2回、3回と繰り返すうちに、写せる語数が増えれば、その効果を実感できると思ったのである。ところが、これは意外なことに、受講生には不評であった。鉛筆をもってノートに英文を写すという作業など、それこそ何十年もやっていないことである。慣れていなければ、書くという作業自体もそれなりに疲れるし、中高年ともなれば、指が痛い、腕が痛いというような故障を抱えている方もいることを筆者は忘れていた。向上を実感するよりも、負担感が強いようでは楽しくない。スピードを競う訓練は中高年にはあまり向いていないようである。また、受講者の中には「耳の聞こえが悪くなっているの、先生大きな声でお願いします」と、率直におっしゃって下さる方もいた。そういうお話を伺って以来、CDなどを流すときの音量も最大に、講師の声もできるだけ大きく、はっきりと話すことにした。リスニングも一部とり入れているが、過度の負担

にならないスピードと分量にとどめている。

30代～40代の方は別にして、それ以上ともなれば誰しも記憶力が衰えてくる。だから、これは前の期に、或いは前の時間に採り上げたことだからと思ひ、あまり説明を加えずにさっと流してしまうのはよくないようである。講師の一人合点は禁物で、同じことでも繰り返し繰り返し説明する方が歓迎される。筆者の講座は長いお付き合いの方が多いので、その辺りは遠慮なく要求が出る。「先生、今の箇所、もう一度お願いします」とか「もう少し具体的に説明して下さい」といった具合である。反復練習を通しての向上はいくつになっても必ず実感できるが、それでも、新しく単語を覚えるというのはなかなか大変である。柔軟な記憶力を持っている20代前半頃までならそれほど苦勞せずに覚えられるが、それ以降はかなりの努力を要する。筆者自身、身をもって実感していることであるが、新しい単語はなかなか覚えられない上、よく知っていたはずの単語ですら、スペリングや意味まで怪しくなる。中高年の学習者にとっては、現状維持していくだけでもかなり大変なことなのである。

このように書いてくると、中高年になってから英語のような記憶力のいるものを学習することは意味がないと思われるかもしれない。しかし、実は強力な助っ人が存在するのである。それは国語力であり、社会全般に対する知識である。専門的な知識を要する特殊な英文を読むのでなければ、中高年の人が備えている文章の読解力や社会常識は、英文を読むに際して大きな助けになる。意味の分からない語があったり、文法的なとり方が多少間違っている、その話題に関して知識があれば大筋は理解でき、大きく逸脱してしまうことはない。また、日本語の豊富さは英文和訳をしていく上で強力な武器となる。実際、講座の中でも、筆者自身の未熟さゆえ、受講生の方に教えていただく場面がたくさんある。実に美しく、達意の日本語に訳して下さり、「あっ、そういう言葉があった」と思い

出させられることもあるし、英文の字面だけからでは分からない背後関係などを教えていただくことも多い。特に、企業の現場で英語を使ってこられた方は、社会、経済、法律的な知識も豊富であり、大学という狭い社会しか知らない筆者より、遙かに豊かな実際の言語体験をお持ちである。また、海外で生活した経験のある方も実生活に根ざした言語体験が豊富である。そうした方々の体験談を聞くのも、講師のみならず他の受講生にも大きな刺激になる。

最新の脳科学の研究によれば、何歳になっても、たとえ認知症の症状が出ていても、刺激を与えることによって脳を鍛えることができるという。「1 ページ前に調べた単語なのに、もう意味を忘れてまた辞書を引きます。がっかりします」とおっしゃる方も多い。でも、10 個単語を調べて、その 10 個を皆忘れてしまってもよいではないか。次にまた調べたときに、頭のどこかにひっかかる単語があるかもしれないし、繰り返していくうちに連想や勘も働くようになる。筆者としては、面倒臭いと思っても、辞書を引く気持ちがあるだけで充分有り難い。辞書を引きさえすれば、覚えようと思わなくても自然に頭に入ってくる筈の 10 代、20 代の若者が何と辞書を引かないことか。辞書はおろか、教科書、筆記用具すら持参しないような学生が増えているのに比べたら、家事や仕事の合間に音読したり、辞書を引いて訳したり、リスニングの部分は何度も聞いてくださる努力には頭が下がる。本文まで丁寧にノートに写してある方もいる。教師が要求しなくても、各自が自分に合った勉強法を見つけて努力しているのである。予習・復習は英語にとどまらない。授業の教材に関連したことを、新聞や雑誌の記事から拾ってきて下さる。インターネットで調べたり、関連した書籍を読んだり、映画を観たりと自主的に活動して下さる。それをまた授業で報告して下さる。こうして見聞き 2 ページに満たない英文から、どんどん新しい世界が広がっていくのである。

遅々とした歩みに見えても、こうした地道な努力は必ず成果が出る。何年も筆者の講座を受講して下さっている方から、「この前、久しぶりにアメリカ人の友人と電話で話したら、英語が上手くなったと言われました。英会話の講座ではないのに、不思議ですね」と言われたこともある。また、やはり何年か受講なさった後、遂に大学の英文科へ社会人入学なさった受講生もいる。英検や TOEIC の受験を目指す方、翻訳者や通訳・ガイドというプロの道を目指す方も、即効性はないかもしれないが、単なる受験のための勉強ではない講座から、何かを学んでいただければこれほど嬉しいことはない。

## 5. 結び

これから団塊の世代の定年退職が始まる。その予兆とまではいかないが、筆者の英語講座にも男性が増えつつある。かつては大体各クラス 1 名であったのに、現在は 5 名の方が参加していらっしゃる。表 2 (文末 11 頁)に見られるように、男性の場合 60 代までは、「余暇にする学習・研究」の 5 位までに英語は必ず顔を出しているのだから、これは不思議なことではなく、もっと増えてもおかしくないのかもしれない。電通の調べでは 23 歳から 59 歳までの労働時間は 8 万 8 千時間。60 歳から 79 歳までの自由時間は 9 万 1 千時間だという。この時間をどう使うかが第 2 の人生の質 (QOL) を決めることになる。

社会生活基本調査によると、60 代以上の余暇の過ごし方は、在宅型余暇 (テレビ・ラジオ・新聞・雑誌、休養・くつろぎ) が積極的余暇 (学習・研究、趣味・娯楽、スポーツ、社会的活動) を遙かに凌ぐ。英語の生涯学習はテレビ、ラジオ、新聞、雑誌で得た知識が役立つことが多いのであるから、講座に足を運んでさえもらえば、在宅型余暇と積極的余暇を旨く両立できることになる。年をとるに連れて外出するのは億劫になりがちであるが、英語に限らず、週 1 回から 2 回程度、あまり遠くなく、気軽に出かけられる場所であ

れば、生涯学習センターに通うのも生活のリズムになるのではないだろうか。

最近、公立の図書館などでも中高年の人たちが時間を潰しに行く姿が目立つようである。桐蔭生涯学習センターでも、受講している講座のない日にも、誘い合わせて訪れる人が増えている。センター内の図書室で読書したり、食堂でお弁当を食べたり、談笑しながら予習をしている方たちもいるという。深入りしすぎず、適度な距離感を保ちながら新しい人間関係を築いていければ、こんな素晴らしいことはない。さらに、フルーツや写真といっ

た趣味的な講座では、ミニ・コンサートを開いて練習の成果を発表したり、簡単なデジタル写真の仕事を受注できるまでになった方もいるそうである。英語の場合はプロとして仕事をする場を得るのは難しいかもしれないが、「学びなおす英語」の受講者は子供たちに英語を教えられる実力は充分にある。若者の学力の二極分解が進んでいる最近の様子からすれば、中学生～大学生の学習支援にも活躍の場があるのではないかと思っている。生涯学習で学んでいることを社会に還元する道が開ければ、また新たな可能性が広がると思う。

参考資料：総務省「社会生活基本調査 平成13年」

表1 「学習・研究」の種類、目的別行動者率

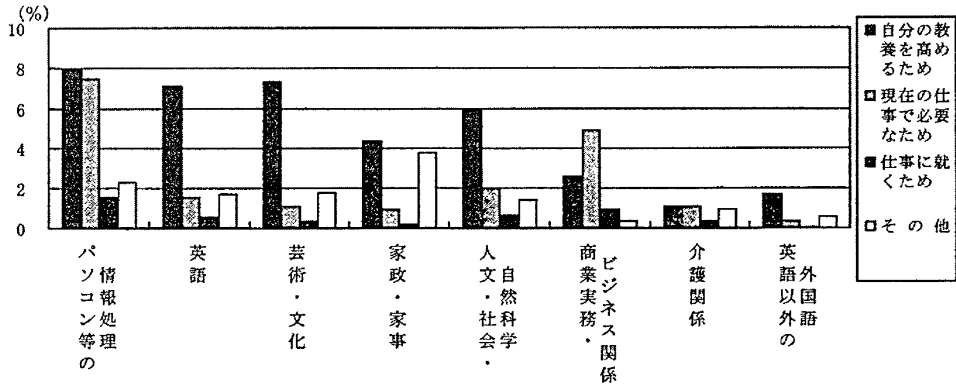


表2 年齢階級、「学習・研究」の種類別行動者率の順位

男	1位	2位	3位	4位	5位
10歳代	英語	人文・社会・自然科学	パソコン等の情報処理	芸術・文化	家政・家事
20歳代	パソコン等の情報処理	英語	人文・社会・自然科学	商業実務・ビジネス関係	芸術・文化
30歳代	パソコン等の情報処理	商業実務・ビジネス関係	英語	人文・社会・自然科学	芸術・文化
40歳代	パソコン等の情報処理	商業実務・ビジネス関係	人文・社会・自然科学	芸術・文化	英語
50歳代	パソコン等の情報処理	商業実務・ビジネス関係	人文・社会・自然科学	芸術・文化	英語
60歳代	パソコン等の情報処理	人文・社会・自然科学	芸術・文化	商業実務・ビジネス関係	英語
70歳以上	芸術・文化	人文・社会・自然科学	パソコン等の情報処理	商業実務・ビジネス関係	家政・家事

女	1位	2位	3位	4位	5位
10歳代	英語	家政・家事	芸術・文化	人文・社会・自然科学	パソコン等の情報処理
20歳代	パソコン等の情報処理	家政・家事	英語	芸術・文化	人文・社会・自然科学
30歳代	パソコン等の情報処理	家政・家事	芸術・文化	英語	商業実務・ビジネス関係
40歳代	パソコン等の情報処理	家政・家事	芸術・文化	英語	介護関係
50歳代	家政・家事	パソコン等の情報処理	芸術・文化	介護関係	英語
60歳代	家政・家事	芸術・文化	パソコン等の情報処理	介護関係	人文・社会・自然科学
70歳以上	家政・家事	芸術・文化	介護関係	人文・社会・自然科学	パソコン等の情報処理